2015年
7月号

カトリック笹丘教会
教会ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1
☎761-4504 F761-4524
広報委員会

福岡教区今年度の目標…「信仰の伝達」
小教区今年度のテーマ…「学び、伝えよう、家庭から私たちの信仰を」

殉教者の心

主任司祭　遠山満

旧約聖書の『雅歌』の中に次のような一節があります。「エルサレムの乙女たち、私は黒いけれども美しい。ケダルの天幕のように、シャルマの幕のように。私に目を注がないで下さい。私は陽に焼けて浅黒いのです」（1章5～6節）。私達は、旧約聖書の雅歌をしばしば男女の恋愛の詩として受け取りがちですが、キリスト教の中でも、ユダヤ教の中でも、伝統的に霊的な解釈が試みられてきました。1965年、パリのシナゴグ（ユダヤ教会堂）で行われた過越し祭の中で、一人のラビが次のような解説を加えました。「私は黒い――私、すなわちイスラエルの共同体は、世代から世代へ反セム（ユダヤ）主義の煙によって黒くされてきた。しかし、エジプトの迫害からナチスのガス室に至るまでの試練の煙によっても、イスラエルの美は少しも侵されなかった。私は黒いが、美しい――」。三位一体の聖体宣教女会のシスター・マグダレナ・エステル・トーレスは、これに加えて次のように言います。「イスラエル共同体は多くの殉教、様々な十字架によって、いっそう美しくなりました」。何と美しい解説でしょう。

さて、今月7月1日、私達は7年前に列福された188人の殉教者をお祝いしました。その中には、私達アウグスチノ会会員、金鍔次兵衛神父様もいらっしゃいますし、笹丘教会で劇をした、小笠原玄也一家も含まれています。彼らは、長い間、信仰の為に迫害を受けました。小笠原玄也一家は、武士としての身分を奪われ、長い間、貧しい生活を余儀なくされました。人は、他の人から迫害されると、自分自身も迫害者となる可能性があります。つまり迫害されれば、人間性が堕ちていくことがあるのです。小笠原玄也一家も、そのようになる可能性がありました。けれども、彼らは、人としての誇りを捨てることはありませんでした。彼らは、武士としての身分は剥奪されましたが、神の子としての身分を、誇り高く生きたのです。

私達も、この世を生きる際、私達に付随する様々な要素が、私達の自己価値感情を支えているのかもしれません。それは、私達の社会的な地位であったり、学歴であったり、富であったり、才能であったり、若さであったり、体力であったり、人によって、それぞれ異なることでしょう。ただ、それらは、私達の人生の終わりの時まで、私達の自己価値感情を支えるものとはなりえません。私達を人生の最後まで支えるもの、それは神の子としての誇りです。パウロは言います。「誇る者は主を誇れ」（Ⅱコリント10章17節）。殉教者は、弱い自分の中に働かれるイエス様を感じながら自分を捧げました。私達も殉教者に倣い、神の子としての誇りを生きていくことができますよう、必要な恵みを願いましょう。

拡大信者会議事録　平成２７年７月５日 11：20～11：50

初めの祈り（主の祈り）

１．拡大信者会のありかたについて

教会運営の可視化により、拡大信者会を廃止にする旨を提案されたが、拡大信者会の存続を望む意見が出されたため再度役員会で検討された。その結果を報告。

・参加メンバーを班長に限定せず、オープン参加としてだれでも参加が可能とする。

・開催頻度は年三回程度（２月、６月、１０月その他役員が必要と認めた場合)として決定機関ではなく意見を出し合う場として存続する。

【拍手で承認された】

２．教会運営のチーム長会について

前回の拡大信者会で出された副チーム長の必要性については、チーム長会にチーム長が出席できない場合も想定されるため、副チーム長をあらかじめ専任しておくことにする。

３．連絡網について

現在、５０件程集まっている。７月１２日締め切り。アンケート用紙を取られてない方は、郵送する。連絡網が整備できてから、教会運営組織作りにとりかかる予定。メール希望の人は、教会のアドレスをお知らせし、各自そのアドレスに空メールを送信する旨説明があった。

４．「教会ニュース」の信仰のルーツコーナーについて

６月は古川さん、７月は前田美由紀さんに書いていただいた。原稿を募集。８００字程度。役員または広報委員まで提出いただきたい。

５．神父様より

・召命の集いのために、模擬店を出して欲しいと依頼があった。(笹丘教会はカレーを出店することにした。綿菓子機も購入したので綿菓子も出す予定。もし、利益が出たら一部を神学校に寄付。残りはできればバザー用のかまどを購入したい。)

・教会学校を手伝っていただくシスターを探している。

・幼稚園運動場入口の門扉が倒れるので修繕工事をする。７月１１日（土）

会長より

・冷蔵庫のパッキンが壊れた。チルドの引き出しをきちんと閉めてドアを閉じないと壊れやすくなる。修理をする。

終わりの祈り

「信仰のルーツ」コーナー

わたしの信仰の原点・・・・母の祈る姿と笑顔

姉妹で２人、伯母２人、従姉妹５人、両親の従姉妹まで合わせると両手では足りない・・・私の周りのシスターたち。そういう家庭に生まれてしまった・・・。

子どもの頃は、日曜日に友達と遊びに行く時は勿論、運動会、部活、模擬テストとそれらの時も朝６時の一番ミサに行ってから。５月の聖母月は夕方、教会でロザリオ。それが当然至極あたりまえと育てられた。

しかし、私にも反抗期はやってきた。教会に行くのはそれほど大事なことなのか？私の意志ではなく、親が勝手に洗礼を受けさせたのではないか。知ったもんか！！ふつふつと不満が湧いてくる。でも親にはなんとなく言い出せない。それなのに母は、やれ夕の祈りだ、クリスマス前には告解だ、と畳み掛ける。頭にきた私は今後一切祈りはしない！と宣言し、母を泣かせたこともある。告解部屋では「私には罪はない。」と神父様に言い放ち、母に勝った気でいた。（今考えても恐ろしい・・・）それでも日曜日のミサだけは行った。義務と義理と習慣（？）だった。

大人になり、縁あって実家を離れた。これでミサだ、祈りだと言われずにすむ・・はずだったのに、カトリック信者ではない夫にお願いしたのは私が日曜日にミサに行くことと、子どもができたらカトリック幼稚園に入れること。結婚して初めて日曜日のミサにあずかった時、本当にほっとしたことを覚えている。安堵と安心感となんとも言い表しがたい物に包まれている。そんな気がした。周りの環境は180度変わってしまったけれど私の中には変わらないものがある。私を作る血や肉と同じように、私の根っこが、芯が、親から受け継いだカトリック信者というものでできているのだろうか。

母は姉が志願者となった日から、朝のミサを欠かしたことがない。さすがに最近は年をとり体調次第ではあるが。私が祈らないと宣言した日も祈っていた。父が亡くなってからは祈りが母を支えてきた。今も子どもの為、孫の為にと毎日祈っている。私が母を想うとき、母の祈る姿と笑顔が浮かぶ。私の信仰の原点はここにあるといっても過言ではない。

（M・M）

編集後記

５月の連休に初めて屋久島を訪れた。往復 10 時間という縄文杉トレッキングは数年来の憧れで、そのために夫ともども体力づくりとダイエット？に励んできた。何とかたどり着いて見上げるとやはりそれは圧倒的な存在感であった。霧で全体像が見えないのもかえって幻想的で、心の底から「やっと出会えた。来てよかった。」と思った。

旅先から家に戻って数日後に、テレビで『屋久島　巨木に集う人々』というドキュメンタリー番組が放送された。進路に迷う大学生、海外から帰国したばかりのビジネスマン、反抗期の高校生を連れた父親、支援学級の担任になって日々悩む新人教師、幼い息子を亡くした若い父親などが、それぞれの思いを胸に樹齢 7000 年ともいわれる巨木に「会いに」来る。一人の若い女性はその理由を聞かれて「木に呼ばれたから」と答えていた。黙って木の前に立ち、しばらく向き合い、なぜか皆安らかな顔になって山を下り、また日常の生活に戻っていく。

番組を見ながら、この木は人々にとってイエス様のような存在なのかもしれないと思った。縄文杉と違ってイエス様は遠くまで訪ねなくてもいつもそばにいてくださる。祈りの中で話すこともできる。私たちも常に「呼ばれて」いるのだろう。（Ｓ．Ａ）